

中学国語 品詞・文節等文法まとめ

品詞・文節・助詞のポイントをまとめたもの。**赤字や太字** はとくに大切な部分。

■ 自立語と付属語（品詞の全体像）

単語は **自立語** と **付属語** に分けられる。分け方は **一つで意味が成り立つかどうか**。

自立語	付属語
一つで意味がわかる	自立語にくっついて働く
文の中心となる	文法的な役割を果たす
8 品詞	2 品詞

自立語の 8 品詞 とは、**単独で意味が通じる 8 種類の品詞** のこと。

品詞	はたらき	例
名詞	人・物・場所・ことなどの名前を表す	犬、本、学校、日本
動詞	動作や状態を表す	食べる、走る、ある
形容詞	性質や状態を表す（「い」で終わる）	赤い、暑い、高い
形容動詞	性質や状態を表す（「だ」が付く）	静かだ、きれいだ、元気だ
副詞	動詞・形容詞などを詳しく説明する	とても、ゆっくり、よく
連体詞	名詞を詳しく説明する	この、その、あの、大きな
接続詞	文と文・語と語をつなぐ	だから、しかし、また
感動詞	あいさつや感情を表す	はい、おや、こんにちは

付属語の 2 品詞 とは、**助詞** と **助動詞**。

品詞	はたらき	例
助詞	言葉と言葉の関係を示す	は、が、を、に、へ、と、で、

品詞	はたらき	例
		も、の
助動詞	言葉に意味を付け加える	た、ない、ます、れる、らしい、そうだ

1 文節に分ける

文節とは、文を **意味のわかる範囲**でできるだけ短く区切ったひとまとまり。区切れ目は「ね・さ」を入れて 不自然でないかで確かめられる。

例 私は（ね）／本を（ね）／読む（ね）

連文節 とは、**二つ以上の文節がまとまって、一つの文節と同じ働き**（主語・述語・修飾語など）をするもの。主・述、修飾・被修飾、並立、補助の関係にある文節どうしが連文節を作る。

例 白い／花が 咲いた。→「白い／花が」が主語のまとまり（連文節）

① 「て・で・く・を」を合図に分ける

文節の切れ目の目印は「**て・で・く・を**」。この四つがあれば、その手前で分けられることが多い。

文節に分ける例： 読んで／いる 高く／ない 弾いて／いる 散歩を／する

一つの文節とする例（て・で・く・を ではない）： 思い出す 見かけました 飲まない
散歩する

目印が示しているもの

- **て・で**＝補助の関係の前（走って／いる）
- **く**＝形容詞の連用形の下（高く／ない）
- **を**＝格助詞「を」の前（本を／読む）

※あくまで目安。「てでくを」でない語（思い出す・見かけました・飲まない・散歩する など）は一つの文節。

② 一つの文節に、自立語は一つ

一つの文節には自立語が **必ず一つ**。二つもないし、零でもない。自立語は **文節の先頭** に来る（付属語は自立語の後ろにつく）。

③ 形式名詞

名詞本来の意味がうすれ、形式的に使われる名詞。**名詞なので自立語**で、単独で文節を作る。

例 僕の／ことを 中二の／ときに 言う／とおりに 見える／はずだ 終わる／つもりだ

④ 連体詞

名詞を直接修飾する言葉で、それ自体は**活用（形が変化）しない**品詞。**名詞の前にしか置かず、形が変わらない言葉**。連体詞は自立語なので文節に分ける。

♪ 連体詞の覚え歌 （「いつも裸のキューピーさん」の節で）

あの この その どの 連体詞

大きな 小さな 連体詞

いわゆる あらゆる とんだ ある

わが たいした 連体詞

例 この／人を その／人を あの／人を どの／人を 大きな／犬だ 小さな／犬だ ある／人が いかなる／状態 我が／道を

2 補助の関係

補助語とは、**前の文節に補助的な意味を添える文節**（下の例の いる・ゆく・ある・ない など）。この補助語と、その直前の文節との関係を **補助の関係**という。

例 走って／いる 飛んで／ゆく 花で／ある 飛んで／ない

補助の関係が分かると？

- 補助語（補助動詞・補助形容詞）は **自立語**なので、**単独で一つの文節を作る＝分ける**。だから「走って／いる」のように「て・で」のところで切れる。
- 補助の関係にある二つの文節は、必ず **連文節**になる。「走って／いる」は二文節だが、意味の上では「走っている」という一つの述語のまとまり。
- → 文節分けで「**なぜここで分けるのか**」を説明できるようになる。

① 補助動詞（形式動詞）

「－て」「－で」の**形**で前の文節につく。本来の動詞の意味がうすれ、意味を添える。ふつう

ひらがなで書く。自立語なので、単独で一つの文節を作る（＝分ける）。

なる語：ある・いる・おく・くる・くれる・しまう・みせる・みる・もらう・やる・ゆく（いく）

② 補助形容詞（形式形容詞）

本来の意味がうすれて、直前の文節に意味を添える形容詞。付属語の助動詞と働きは似ているが、自立語であって単独で一つの文節になり、直前の文節と **連文節** を作る。

例 あまり 暑く／ない 料理を 食べて／ほしい

3 まぎらわしい品詞の見分け

見分ける力は、大きく二つの場面で使う。①**品詞名を答える問題**（「――線の品詞名を書きなさい」など）と、②**文節を分けるか分けないかの判断**（自立語なら分ける・付属語なら分けない）。

① 形容詞「ない」と助動詞「ない」

「ない」を「ぬ」に置きかえられる → 助動詞（文節に分けない）。置きかえられない → 形容詞（分ける）。

例 高く／ない（形容詞） 読まない（助動詞）

※「高くはない」のように、間に「は」（助詞）を入れられるのも形容詞の目印。

何のために見分ける？

- 形容詞の「ない」は自立語 → 前で **文節を分ける**（高く／ない）。
- 助動詞の「ない」は付属語 → **分けない**（読まない）。
- → どちらの「ない」かで **文節の切り方が変わる** ので見分ける。

② 形容詞・形容動詞・副詞の見分け方

手順1 言い切りの形（。で終わる形）に直せるかチェック。直せず形が変わらないなら **副詞**。形が変わる（活用する）なら手順2へ。

手順2 言い切りの語尾を見る。「い」→**形容詞** ／ 「だ」→**形容動詞**。

品詞	言い切りの形	例	打ち消し・特徴
形容詞	「い」で終わる	高い・楽しい・寒い	高くない（～くなる）
形容動詞	「だ」で終わる	静かだ・元気だ・有名だ	静かでない（～でになる）
副詞	活用しない	ゆっくり・とても・すぐ	形が変わらない

何のために見分ける？

- おもに「**品詞名を答える問題**」で問われる（この語は形容詞？ 副詞？ など）。
- 三つとも **自立語** なので、**どれも単独で一つの文節を作る**（文節分けでは同じ扱い）。ちがいは **品詞名と活用の有無**（副詞だけ活用しない）。

③ まぎらわしい形容動詞

「**あんなだ・こんなだ・そんناد・どんなだ**」は**形容動詞**。そう暗記しておく。（連体詞の「あんな・こんな…」と混同しやすいので注意）

4 用言と活用形

用言とは、**活用する自立語で、単独で述語になれるもの**。**動詞・形容詞・形容動詞**の三つを指す。

⇔ 体言＝活用しない自立語で、主語になれるもの（＝名詞）。

用言や助動詞は、下につく言葉によって形が変わる（**活用**）。活用形は次の六つ。

活用形	下につく主な語	例（走る）
未然形	ない・う・よう	走ら（ない）
連用形	ます・た・て	走り（ます）
終止形	。（言い切る）	走る。
連体形	とき・もの・こと（体言に続く）	走る（とき）
仮定形	ば	走れ（ば）

活用形	下につく主な語	例（走る）
命令形	！（命令して言い切る）	走れ！

* 可能動詞

「～できる」の意味を一語で表す動詞。**すべて下一段活用。**

例 読める・飛べる・話せる

5 助動詞

付属語で活用する。用言などについて、意味を添えたり判断を表したりする。

なぜ覚える？ どう役立つ？

- **助動詞は付属語** なので **単独で文節を作らない**（前の自立語につく）。→ 文節分けて「**ここは分けない**」と判断できる（例：読まない）。
- 「ない・そうだ・らしい」などが **助動詞か他の品詞か** を見分ける **品詞識別の問題** で使う。
- れる・られる（**受身・可能・自発・尊敬**）など、**意味や活用を問う問題** にも出る。

主な助動詞 （「桃太郎」の節で歌うと覚えやすい）

れる・られる ／ せる・させる

ない・たい・らしい ／ そうだ・ようだ

です・ます・た・だ・ぬ ／ う・よう・まい ／ たがる

6 助詞

付属語で活用しない。単独では文節を作れず、自立語などの後について、**語と語・文と文の関係**を示したり、**意味を添えたり** する。

→ 助詞が読めると、「**文の組み立て**」と「**文どうしのつながり**」が見えるようになる。

種類	はたらき	主な助詞
格助詞	主に体言につき、その語が文中で果たす役割（主語・目的語・場所など）を示す	が・を・に・へ・と・より・から・で・や・の
接続助詞	活用する語につき、前後をつなぎ関係（順接・逆接など）を示す	ば・と・ても・けれど・が・のに・から・ので・し・て・ながら
副助詞	いろいろな語につき、意味を添える	は・も・こそ・さえ・だけ・ばかり・まで・など
終助詞	文末につき、気持ち・態度を添える	か・な・ね・よ・わ・ぞ

① 格助詞

何につく：主に体言（名詞）。

なぜ覚える？ どう役立つ？

- 格助詞は「その言葉が文の中で **どんな役割か**」を示す目印。→ 主語（が）・目的語（を）・場所や相手（に・で）などが一目でわかる。
- 読解で「**誰が**」「**何を**」したのかを取りちがえない。
- 文節どうしの関係（**主・述の関係、修飾・被修飾の関係**）を正しくつかめる。
- 品詞の識別（例：「の」）にも使う。→ だから **並びだけでなく一つ一つの「働き」をセットで覚える** のが大事。

格助詞	はたらき（意味）	例
が	主語を示す	鳥が鳴く
を	動作の対象（目的語）	本を読む
に	場所・時・相手・帰着点	学校に行く／友に話す
へ	方向・帰着点	東へ進む
と	相手・引用・並立	兄と行く／「はい」と答える

格助詞	はたらき（意味）	例
より	比較の基準・起点	兄より背が高い
から	起点・原因・材料	駅から歩く／油から作る
で	場所・手段・材料・原因	公園で遊ぶ／ペンで書く
や	並立（例として並べる）	本やノート
の	連体修飾・主語の代用・体言の代用	私の本／目の大きい人

覚え方：「鬼が部屋の戸から出より」 ＝ を・に・が・へ・や・の・と・から・で・より

② 接続助詞

何につく：活用する語（用言・助動詞）。

関係	主な接続助詞	例
順接	ば・と・から・ので	寒いから休む／押すと開く
逆接	が・けれど（も）・のに・ても	安いのに買わない／雨でも行く
並立・添加	し・たり・て	安いし、うまい
同時・付帯	ながら・て	歩きながら話す

③ まぎらわしい「から」の見分け

直前が体言（や「て・で」）→ 格助詞（起点・原因・材料）。

例 駅から（起点） 疲れから（原因） ミルクから（材料） 済ませてから（「て」の後）

直前が活用語の終止形 → 接続助詞（確定の順接＝理由）。

例 難しいからできなかった

④ 副助詞・終助詞（参考）

副助詞 いろいろな語について意味を添える。は・も・こそ・さえ・だけ・ばかり・まで・など。

例 私は行く 五分だけ 君こそ

終助詞 文末について、気持ちや態度（疑問・感動・禁止・念おし）を添える。か・な・なあ・

ね・よ・わ・ぞ。

例 行くの？ すごいなあ だめだよ